

現代文 短歌・俳句

春風や〔俳句〕〈全二回〉

理解を深めるために

■学習のねらい■

現代の俳句に詠まれた自然や生活のひとこまを読み味わう。

*

*

*

春風や 〈1〉

俳句の中の自然を感じる

芋の露連山影を正しうす

飯田蛇笏
いいただ だこつ

〔通釈〕 芋の葉に露が降り、その露に畑の向こうにある山並みが姿勢を正すようにまっすぐくつきり映っている

●季語―「芋の露」秋

芋畑の近景と山並みの遠景、芋の葉や露の丸い感じと山並みの直線的な感じとをそれぞれ対比させている。

水原秋桜子
みずはらし とうおうし

冬菊のまとふはおのがひかりのみ

〔通釈〕 冬菊がまとっているのは自分自身の光るような美しさだけである

●季語―「冬菊」冬

「まとふ」は擬人法。冬枯れの景色の中で、菊の花自身が輝いているように浮き上がって美しく見えている。



講師

畠山 俊

俳句に現れた生活を読み味わう

なかむらていじよ
中村汀女

咳の子のなぞなぞあそびきりもなや

「通釈」かぜをひいて咳をしている子どもがなぞなぞあそびをきりもなく
せがんでいる

●季語―「咳」冬

「きりもなや」は「きりもなし」(古語)という形容詞の語幹に詠嘆の助詞「や」
がついているもの。かぜをひいて寝ていなければならず、退屈している子どもの
相手をしている母親の愛情が感じられる生活のひとこまを句にしている。

まゆすみ
黛まどか

旅終へてよりB面の夏休

「通釈」楽しい旅が終わってからは、つまらない付けたしのような夏休み
になってしまった

●季語―「夏休み」夏

「B面」とは「A面」の主に対して、副であるということ。レコードなどで用
いられた語。楽しみにしていた旅も終わってしまい、その後の夏休みは付け足し
のようになってしまった気分を歌に詠んでいる。日常に用いる言葉を使って詠ま
れている。

春風や〈2〉

■学習のねらい

旅や希望を詠んだ俳句を鑑賞し、その中に込められた作者の心情について考える。

*

*

*

旅を詠んだ俳句を鑑賞する

山口誓子
やまぐちせいし

流水や宗谷の門波荒れやまず
そうや となみ

〔通釈〕流水よ。宗谷海峡に立つ波は荒れ狂っていることだ

●季語―「流水」春

作者は北海道から祖父のいる樺太からふとに渡ろうと船に乗っている。春早い海峡は荒い波が立っている。それはこれからの作者自身の進路の厳しさもうかがわせる表現となっている。「や」は切れ字。「門波」は「海峡に立つ波」のことで「万葉集」に使われた語の再発見となっている。

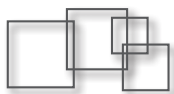
種田山頭火
たねださんとうか

分け入つても分け入つても青い山

〔通釈〕分け入つても分け入つても木々の生い茂った山が続いている

●無季自由律

作者は無季自由律（季語を入れず、五七五の音数にこだわらないこと）の俳句を追求し続けた人である。旅の景色に重ねて自分の俳句の行く末を案じている心情がうかがわれる。



俳句に現れた希望を読み取る

万緑の中や吾子の菌生え初むる

なかむらくさたお
中村草田男

〔通釈〕あたり一面に生い茂った草の中、私の子どもの菌が生え始めたことだ

●季語―「万緑」夏

草の生い茂る生命力と子どもに生え始めた菌の生命力とを中心に表現している。真ん中の七音の途中に意味の切れ目があり、草と子どもふたつが競い合っているかのようなイメージを与えている。作者の子どもの成長を心待ちにしている心情がうかがわれる。さらに、「万緑」の遠景と「菌」の近景、緑色と白色、「万緑」の漢語調と「吾子」の和語の対比なども読み取れる。

はしもとたかこ
橋本多佳子

星空へ店より林檎あふれをり

〔通釈〕星空へ向かって店頭に積まれた林檎があふれ出ていくようである

●季語―「林檎」秋

暗くなるのが早くなった秋の日。家路を急ぐ目に果物屋の店頭の灯りが飛び込んでくる。店頭いっぱいにならず高く積まれた林檎が星空に飛び出していくように見える。「星」や「林檎」が希望を象徴しているように思える戦後復興期の句である。平和な生活が続くことを望む作者の気持ちもあふれ出ているかのように感じられる。